

27. レム睡眠行動異常症における脳血流分布と認知症への進展予測の検討

¹⁾ 埼玉医療センター 脳神経内科,
²⁾ 睡眠医療センター, ³⁾ 看護学部
 沼畑恭子¹⁾, 赤岩靖久¹⁾, 小川知宏¹⁾, 横田隆子¹⁾,
 尾上祐行¹⁾, 滝口義晃¹⁾, 宮本雅之^{2,3)}, 宮本智之¹⁾

【目的】レム睡眠行動異常症 (IRBD) はパーキンソン病やレビー小体型認知症 (DLB) などの神経変性疾患へ移行することが知られている。認知症の早期診断として用いられる脳血流 SPECT 検査の視点から IRBD における認知性疾患への進展予測を検討した。

【方法】当院 IRBD 30 症例に対して 99mTc-ECD 脳血流 SPECT eZIS 解析によるベースライン時の脳血流解析評価と縦断的に観察した神経変性疾患への進展の有無について後方視的に調査した。また、認知症疾患である DLB とアルツハイマー型認知症 (AD) における同解析による cingulate island sign に注目した CIS スコアの解析も評価した。

【結果】IRBD において 99mTc-ECD 脳血流 SPECT eZIS 解析では、閾値を超える例が 3-4 割存在していた。Severity および extent で閾値を超えている群を positive、閾値を超えなかった群を negative 群として IRBD から認知症への移行の有無を検討したところ、positive 群は negative 群に比べて短期間で認知症に移行していた。IRBD のうち 13 例が phenoconversion しており、そのうち 69.3% が認知症を合併していた。

DLB と AD を 79 歳未満とそれ以上の群に分け CIS スコアを比較したところ、DLB で CIS スコアの低下を認めしたが、79 歳未満の群でより AUC が高かった。スピアマン順位相関係数では、CIS スコアと年齢に有意な相関が認められた。

【考察】脳血流 eZIS 解析を IRBD に応用したところ、閾値を超える症例では短期間で認知症へ進行していることが示された。DLB の病理所見として AD の病理を合併することが知られている。一方、DLB にみられる cingulate island sign は内側側頭葉の萎縮との関連が言われており、神経原線維変化の進行に伴い不明瞭化するともいわれている。神経原線維変化は AD でしばしば認められる所見だが、加齢とともに割合が増加すると言われている。ゆえに、CIS スコアでの評価は年齢を加味する必要があると考えられる。

【結論】IRBD における 99mTc-脳血流 SPECT eZIS 解析で、疾患特異領域での閾値の低下を認める症例では短期間で認知症へ移行するリスクが高いことが示唆された。IRBD からの認知症への進展予測に関して 99mTc-脳血流 SPECT eZIS 解析は有用であると考えられた。

28. 10 mm 以上の内頸動脈未破裂脳動脈瘤に対するコイル塞栓術とパイプライン塞栓術の治療成績の比較、検討

埼玉医療センター 脳神経外科
 穴澤 徹, 田中喜展, 鈴木謙介

【目的】当院での大型内頸動脈未破裂脳動脈瘤 (≥ 10 mm) に対するコイル塞栓術とパイプライン塞栓術の治療成績の比較、検討を行い報告する。

【方法】2009 年 4 月以降に治療を行った大型内頸動脈未破裂脳動脈瘤に対するコイル塞栓術 21 症例、またコイル塞栓術後の再発を除き 1 年以上フォローを行ったパイプライン塞栓術 19 症例を対象とした。

【結果】術後 MRI の DWI 陽性率では特に有意差はなかったが、平均手術時間ではコイル塞栓 152 分、パイプライン 101 分と有意差を以てパイプラインの方が短く、コスト面でも有意差を以てパイプラインの方が安価であった。周術期合併症や、1 年後の閉塞率、modified rankin scale では有意差はなかった。再治療となった症例数ではコイル塞栓では 11 例、パイプライン 6 例となった。

【考察】パイプライン塞栓とコイル塞栓では周術期合併症、術後完全閉塞率は同等以上という報告が多く、パイプライン塞栓の効果は高いと考えられる。またパイプライン塞栓とコイル塞栓で再治療を要す割合は同等またはコイル塞栓の方が高いという報告が多数あり、パイプラインの有用性が示唆される。医療費に関しては過去の報告でもパイプライン留置の方がコイル塞栓より安価といわれている。手術時間に関して同様の報告はないが、今回有意にパイプラインの方が短縮されていた。術者の習熟度に依存すると思われるが、当院では全例同一チームで治療に臨んでおり技術の差はないと思われる。コイル塞栓に用いたコイル数は平均 16 本だが、パイプライン留置にコイル併用を要したのは 35 例中 4 例で、これも手技時間短縮に寄与していると考えられる。

【結論】パイプライン塞栓術はコイル塞栓術と同等の治療成績で、安価、手術時間が短い等のメリットがあり有用な治療法と考えられる。